

縁起もの

1. 福をよぶ人気者

土産物や民芸品として置いてあるのがフクロウです。個性的な風貌と態度が絵になる鳥であり、「福郎」の語呂合わせから、縁起物として扱われています。最近、生息できる環境が減少し、その声を聞くことも少なくなりました。



フクロウ

全国の森で留鳥として年間見られる鳥です。大木の樹洞などに営巣し、しかも同じ所を好むことから、神社などで通年みるものでした。身近な鳥ですから「ゴロクト」など名前の方言も多く、鳴き声も「ゴロクト ホーセン」とか、“五郎助奉公”“糊付け干せ”など様々に聞きなされています。

打吹山で鳴き声をよく耳にするのは、1~2月の寒い時期、夕方から夜にかけてです。繁殖期が始まったことが市街に居てもわかります。寒さの中ですが耳を澄ませてみましょう。大江神社の上、長谷寺周辺から聞こえることが多いようです。

夜行性で、ネズミなどを捕獲しますが、音のみで餌の居場所を探知できる構造があ顔です。よく回る首も音を正面から捉えるためです。また、巾の広い翼は音を立てずに獲物に飛びかかることを可能にしています。骨や毛などの消化できなかったものは、ペレットと呼ぶ塊として吐き戻すので、地面にこれを見つけることでねぐらがわかります。

2. 代を重ねる

正月飾りに使うウラジロは、代を重ねるという縁起ものです。代を重ねるとは、葉が毎年伸長を続け、写真のように前年の1対の羽片(葉といっている部分)の上に新しい羽片が出ることをいいます。重なっているもの全体が1枚の葉で、茎は地下にあります。



ウラジロの新しい羽片

シダの仲間のカニクサは、温暖な期間、地上部の1枚の葉が限りなく伸長し続け、数mのつるのようになりますが、1年で枯れます。しかし、ウラジロの1枚の葉は、上部に羽片を作りながら何年も生き続けます。ただ、古い羽片は3年目には枯れます。



カニクサ

枯れた羽片はそのまま残るため葉の寿命がわかり、調べると4年ものが最も多く、頂上下東斜面には8年ものがありました。10cm以上の中軸(葉身の中心の軸)の先に毎年同じように羽片を広げ、上に伸びていきますが、年数を経ても重さで倒れ丈が高くなるわけではありません。



シダの葉の構成

ウラジロは林床全面に生育することはなく、コロニーを作っています。根茎は共通でコロニーは同一個体の葉とすると、その大きさは株の寿命の指標といえます。